

地域活性化という「遊び」

16

京都市 福知山市 「みわ・ダッシュ村」から

山本晋也

5月の初め、長男が裏山へ行ってなかなか帰ってこない。また何やら始めた模様。

小学生の頃なら少しは心配したのですが、彼ももう16歳なのでこういう時は放っておくのが一番。しかしかれこれ5時間。ママシやイノシシはもちろんのこと。最近では熊の目撃情報も相次いでいたりするのでさすがに心配になってちよつと見に行つてみようかと話している。と帰ってきました。何やら葉っぱをいっぱい背負っています。



裏山に点々とあるお茶の木

見てみるとお茶の葉っぱ。

「なんや今度はお茶作るんかいな」

「俺、一回でいいから抹茶アイスで腹一杯食べたいねん」

子供のくせに甘いものは苦手という

長男ですが

抹茶アイスは彼の大好物。

大好物と言っても食べる時は本物の抹茶が入った高級品を食べるので

予算の都合もあつたりして

なかなか1人1個ずつというわけには行かず

家族6人で3個とかをちびちび味わいながら食べるわけです。

たまに貫い物でいただいたりして、1人1つずつある時などは

「えーっ！ 1個まるごと食べられんの！」と大騒ぎになります。

そんな事情からか長男は

その贅沢品を満足いくまで心置きなく食べるにはどうしたらいいかと

日頃考えていたように

自分が小学生時代裏山で

お茶の実で遊んでいたのを思い出し

「なんやお茶あるやん」となって

クリエイティブのスイッチが入ったようです。

僕自身草刈りをしながら

山に点々とお茶の木があるのは気がついていたのですが

どちらかというと

コーヒーが好きなのでそれを利用するところまではあまり

考えませんでした。

スイッチが入ると

目標に向かって一直線という

裏山に生えた茶の木が入れた

クリエイティブ・スイッチ

の

若者の素晴らしいところ。

抹茶の乾燥に最適な

温度や時間、蒸し方等

あつという間にネットで調べ

スイスイと事を進めていきます。

数日後乾燥もうまくいき

さていよいよ粉にするかということ

で引つ張り出してきたのは

大豆からきな粉を作る時に集落のお

じいちゃんから頂いた石臼。

抹茶は特に熱を嫌うので冷たい石で

挽くのが最良の方法なのです。

ゴロゴロゴロゴロ

一生懸命臼を回しますが

一向に粉になりません。

原因は回転が逆でした……石臼は時計と反対方向に回すのです。

回転を逆にした瞬間

出てくる出てくる。

「おーすごいすごい！ いよいよ抹茶アイスが近づいてきた！」

出来上がった抹茶アイス。
とてもお茶の味が濃く
美味しかった



料理は毎日の楽しい遊びです。
エプロンも自分で縫いました



石臼でお茶を挽いているところ。
大変な作業もニコニコなす
ところの子供の姿が可愛いところ

毎週練習している手打ち蕎麦に
混ぜて茶そばに。
これも美味しかった

と盛り上がりつつありますが
ここで問題発生、お茶の粒子が粗い
のです。

挽いたものを二度三度と繰り返し挽
いてみましたがやっぱりダメです。

調べてみると、抹茶用の石臼は
高い精度の目立てが必要で

うちの石臼ではこれが限界でした。
アイスクリームというのは滑らかさ
が命なので

このままではざらついた感じが残っ
てしまいます。

ネット茶臼を探してみました
ものすごく高価なものでびっくり。

それこそ抹茶アイスが2年くらい毎
日食べられるお値段です。

結局アマゾンで
手回しのお茶用セラミックミルを
買うことになりました。

次の日こんな僻地にもあつという間
に機械が届き

熱が出ないように機械を時々休ませ
ながらゆっくりゆっくり回します。

格闘すること3時間
やっと自分たちが満足できるレベル
の抹茶ができました。

この抹茶でアイスクリームはもちろ
んどーナツや茶蕎麦まで自作。

お茶用のミルを購入したり
かかった時間を考えると

既製品を買っている方がよっぽど安
いような気がします

出来上がったアイスや蕎麦は
一度食べたら二度と忘れないほど濃
厚な味わい。

これと同じように子供達が過ごした
濃厚な時間は

彼らの中に忘れられない何かを残し
ていると思います。

僕は今という時代
限界集落にとって本当に素晴
らしい時代が来たと思っていて

新しい情報や必要なツールは都会と
全く同じように簡単に手に入るし

世界中に暮らすいろいろな人とネッ
トで意見交換もできます。

加えて都会では手に入らないような
野趣あふれるものも

ちよつと歩けばそこらじゅうに転が
っており

それらに自分たちの創造力と行動力
を混ぜ合わせ何かを生み出すことは

時に大変な苦勞もありますが、
それはそれでとても楽しく素晴らし
い時間なのです。

何もなく消えゆくはずだった限界集
落が、時代の流れとともに

何でもあるし
やろうと思えば何でもできる。

風景も人も光り輝く限界集落という
ふうに変わりつつあって

そこに計り知れない大きな魅力と無
限の可能性を感じずにはいられない
のです。